

はじめに——語り部像のプロファイリング

「プロファイリング」とは聞きなれない言葉だと、お思いになる方があるかもしれません。けれども推理小説や犯罪捜査などで、心理学者や犯罪学者が生活領域や嗜好しこうなど大まかな犯人像を推測する場面は、よくご存知なのではないでしょうか。それが「プロファイリング」です。

もう二十五年も昔のことですが、私は小学生と幼稚園児の母であり、同時に迷い多き三十代でもありました。家事や育児など周囲から必要とされる仕事と、自らが必要とする仕事のギャップに悩んでいたのです。

ギャップを埋めるために私は子どものお話を書きはじめ、やがて児童文学者の故・椋鳩たけつぐ十先生じゅうせいの知遇を得て、児童読み物の作家となりました。そこで何冊かの本を書きながら、ストーリーの勉強のためにと読み始めた昔話は、驚くべき「おとなの世界」でした。子どもを産み育てて「自分はすっかりおとなだ」と信じこんでいた私が、多様な生き方のほんの一部しか知らなかったことに気づかされたのです。

現在残されている昔話は「伝承」という形を取るものが少なく、昭和四、五十年代に続々と出版

された「本」という形式がほとんどです。そこに採集されているお話の「語り部」たちは、採話に訪れた学者や研究者に求められて方言で語っており、その語り口は平易なものですが、お話の内容には卓越した人生観がうかがわれるものでした。それをテープから書き起こしたのは、彼らより数段に現代的な教養を見つけていた研究者たちだったでしょうが、それ以上に語り部たち自身の生活に根ざした知性が輝いて見えたのです。

ところが降り積もる時間に埋もれて、生活を取り巻く環境がまるで異なってしまった現代の私たちには、そのほんとうの魅力がわからず、ただ「古き良き時代の素朴なお話」としか受けとめていない気がします。名前は記録されていなくても、昔話には必ず何人かの語り手の関与があり、その時代時代の、人々の関心の方向へ話し直されているようです。これを「再話」と言いますが、この「再話」の段階で色濃く個人生活が混入し、ストーリーやモチーフだけではない人間のドラマの魅力を昔話と与えているのです。

昔話として残っているお話のうち、古い原形を借りて、語り部自身のドラマを語っていると思われる話をとりあげ、私はその語り部像に迫ろうとしました。彼らの多様な生き方を知ることによって、ほんもののおとなになりたいと願ったからでした。

けれども現存する昔話はまるで凍り豆腐のように固く、台所でじっくりもどしておいしい煮物にしあげるような作業をしなくてはなりませんでした。原著にはありませんでしたが、話の展開ごと

はじめに

に文を分けて順序を示す数字をはさみ、方言や慣れない言葉や表記には原注に加えて（ ）で注釈を増やし、読みやすくするための主語や述語も（ ）で補足し、句読点、「」などを加えました。（比較的平易な漢字にも振り仮名がついていますが、それは原典のものです）

その結果はからずも、犯罪捜査のような「プロファイリング」をすることとなったのです。こうした古い昔話に風味と味わいと栄養がよびさまされ、読む人の骨肉を作る助けになるのではないかと感じています。凍り豆腐を作った厳しい冬の外気の一瞬一瞬のように、語り部の周辺に起こった出来事は推理するかありませんが、推理の先に語り部の肖像が見えてくるのは、甘い煮汁が舌の先に広がるのと同じ感動があります。

昔話は、私たちと同じように悩み苦しみ誠実に生きた、ひとりの人間の人生の軌跡です。多様な生き方をたずねる十一話の昔話と十二の「語り部」の肖像。「昔話のプロファイリング」をお楽しみください。

